

反省的実践家としての教師の成長過程解明への 一考察

～カード構造化法で見えてきたこと～

学籍番号 17AXO13

氏名 山田 剛輔

要旨

本研究は、S小学校における教育実践を校内研究に焦点化して省察し、反省的実践家としての成長過程を明らかにするものである。それによって、S小学校における教育実践を価値づけ、意味づけ、今後、よりよい授業を同僚との協同で探究・創造する契機を提供したいと考えた。そこで、DSRサイクルを構造化して、経験の浅い教師に授業リフレクションとしてカード構造化法を継続的に行うことによって、反省的実践家としての専門的力量である「省察」と「熟考」がどのように形成されていくのかを明らかにした。

まず、2回実施したカード構造化法のプロトコルをカテゴリー化して、量的分析を行った。その結果、「教授」「学習」のいずれの命題も、「省察」としての「状況への思考」の割合が増加した。また、「熟考」として「具体的な改善のための手立て」が増加した。

次に、カード構造化法の内容を比較・分析した。その結果、第1回カード構造化法の「課題の認識による省察」と「抽象的な方向性を認識する熟考」から、第2回カード構造化法では事実を的確に認識して「状況への問いをもって思考する省察」へと深まり、課題解決に向けた具体的な改善のための手立てを見出すような「理論と実践が結びつく熟考」へと変容した。また、この変容は、校内研究における同僚や講師によってもたらされた。

更に、カード構造化法の効果に関するインタビューを行った結果、授業者の思考が明確になり、子どもを「見る力」が高まり、授業における「即興的な思考」に基づいて授業の再デザインを行うことで、授業改善がなされた。

そして、教師の力量形成の契機に関するインタビューを行った結果、役割と責任が与えられることで意欲が向上し、研修をより意味のあるものとして吸収し、同僚との対話が活性化した。また、メンタリングが、教師の力量形成の契機となったことが示唆された。

これらのことから、SDRサイクルを構造化し、授業の経験に基づいて、授業者の課題（ニーズ）に寄り添い、子どもの姿の多様な見取りから改善のための手立てを同僚と協同で行うことで教師の専門的力量が形成されるという、教師の成長過程の一端が解明された。ここで得られた知見は、反省的実践家として重要な要素を提示するものであり、教師の専門的力量を高める教育実践に一石を投じるものである。

なお、本研究では、経験の浅い教師とその所属学年をチームとして学校課題解決研究を実施してきたため、その取り組みが全体へと波及するところには至っていない。そのため、今後、本研究で得られた知見を活かして、学校全体をチームとして学校課題解決研究に取り組み、反省的実践家としての教師の専門的力量を高めていくことが求められる。